

書 評

米家泰作著『中・近世山村の景観と構造』

校倉書房 2002年10月

A5版 366頁 本体7,000円

遠山郷という名にひかれて、その辺りの山間をチベットに行った気分になって徘徊し、雪祭り、霜祭り、花祭りという流域毎に異なった祭りにひかれて訪ねたりしていた評者にとって、本書第5章の『熊谷家伝記』を扱った米家氏の初出論文(『史林』80-1, 1997)に出会った時は、目を見張った。それは、素朴に評者の遊びの場でしかなかった空間が学問になるのかという驚きにつぎが、伝記というテキスト読みの深さに感心した記憶がいまだに鮮明である。この論文を含めて米家氏の山村研究の集大成(学位論文)がこのたび1冊の書物としてまとめられたことは嬉しい限りである。

第3章、4章、そして第6章と大和国吉野郡を事例にした研究が続く中で、第5章の遠山郷の南信濃が挿入されているのは、一瞬奇異な感じがするが、本書をまとめられるにあたって、どうしても6章の前に5章『熊谷家伝記』を置かなければならない理由がよくわかる。それは初出稿にはなかった「中世を回顧する近世山村民(その1)」という副題が新たにつけられたことから十分に察せられるし、第6章に同名の副題(その2)がつけられ、その連続性が発展的に展開されているからである。この2章だけでも本書のタイトル「中・近世山村の景観と構造」を裏切らない読み応えのある書物になっている。

さて、以下、本書の構成順に、各章の概要を筆者の論文作成意図を中心に紹介し、その上で私見を交えた議論を展開してみたい。

第1章「前近代の山村研究に向けて—その文化・政治・経済—」:「山村」という概念自体が歴史的に形成された村落観であると考えている筆者のここでの研究史概観は、従来様々な定義がある「山村」概念の差異を比較したり、あらかじめ定義を設けることをしない。論者によって、あるいは時代によって性格を変える「山村史」像を整理し、「山村」という言葉の下で何が論じられてきたかを問題とする立場で語られている。そこでは民俗学、地理学、民族学の潮流と、歴史学の山村研究

とをかみ合わす努力がなされ、文化、政治、経済の三分野から概観と展望がなされている。

文化面の「縄文の系譜」(山村に伝存した生業の起源を縄文期に求める想定)に関して、古代～中世における平野部＝稲作／山地部＝非稲作といった二項対立的な枠組みを否定し、人口移動・生業の両面において山地と低地の間に明確な境界線を引くことに疑問を投げかけている。古代・中世における低地から山地への人口移動が、稲作文化への収斂が不完全なままの「畑作文化」を山地へと展開させた可能性を指摘している点は興味深い。政治面、経済面においても、「山村地域」の特化、あるいは「周辺地域化」は近世に顕在化したものとして捉えられている。

第2章「中世山村と山地空間—土佐国大忍荘槇山における名の領域と空間認識—」:中世の山村において、その境界が現在の行政界から推測して稜線・谷線に一致する傾向があるろうとされる一方で、飛び地、焼畑や森林生態系に依拠する山村民の行動に注目して尾根や谷などは必ずしも境界にはならない、という2説に対して、実際地形が中世の山村住民にどれほど意識されていたのか、そして開発・領域化において地形がどのような意味を持っていたのかを、丹念に実証した論考である。その結果として、中世後期の「名領域」に関しても、近世村境に認められた稜線・谷線や集水域への整合性がある程度はあったことを明らかにしている。中世の山村住民は生活空間における地形の状況や位置関係をよく認識しており、地形は山中の諸地点とともに空間認識の要素となっていたことを、名領域の境界を示した史料から地名、地物を拾い出すことによって明らかにした。

第3章「大和国吉野郡川上郷井戸村における近世前期の畑作景観—文禄検地・延宝検地を中心に—」:中・近世を対象とする本書にとって、両時代の検地帳を比較する本章の意義は大きい。文禄4年(1595)と延宝7年(1679)と86年も時差がある検地帳を1筆ごとその継承を追跡することはまずできない。それを延宝6年の「御検地銘々地引帳」という古検地時の評価を記録した帳簿を手がかりにして見事に照合させ、両時代の景観の復原を行

うことに成功している。その結果、文禄期の集落景観は、必ずしも安定した常畑だけからなるのではなく、非耕作地、山畑が存在していたことを示し、延宝期に至って集落を構成する屋敷と常畑が拡大することなく、その外縁に位置する切畑が検地の対象として浮上してきたことを明らかにした。さらに、その切畑に積極的な評価を与え、畑地の農業経営が自給作物栽培から商品作物指向へと変化したことを述べている。こうした作業の一環で、延宝期に見出された「下々畑」に焼畑の可能性のあることを論証している点は、従来の常識（上・中・下・下々畑は常畑）に再考をせまる発見であることを指摘しておきたい。

若干の修正を願うならば、対象地域全体図（図3-1）と部分図（図3-2～13）の方位は統一すべき、またベースマップとして昭和42年の地形図と平成9年の数値地図を使用しているが、そこには近年の大きな地形の改変も見られるので、出来るだけ古い時代の地形図を使用すべきであろう。さらにマイクロな、小字、地筆をベースに議論が進められているが故に、1枚でも大縮尺の地図が示されていたならば、各種地目のみならず荒地の状況も明かにされ、当時の集落景観をより鮮やかに読者に伝えることができたものと惜しまれる。

第4章「大和国吉野川上流域における焼畑の出入り作と『村領』について」：17、18世紀の川上郷諸村において、焼畑の出入り作が村境を越えてなされていたことが確認され、そこには十分な山野面積がある限りは、村境地帯において他村民を排除する理由はなかつとされる。しかし、山畑の造林を契機として、他村領における持分を休閒期間を挟まずに使用するには、今まで以上の対価を払わなければ行かなくなり、その件に関する山論も増え、おのずと「村領」を意識するようになったとしている。単なる焼畑出入り作に関する研究の域を越えて、その利用のあり方の変化を通して、領域論にまで考察を深めた点は大いに評価されよう。

この章には補章がついており、山村の村絵図にみる山容描写と空間構成が語られている。山村の人々の山地に対する知識や認識の深さを山絵図と数値地図画像を組み合わせることによって読みとろうとするものである。村絵図の山体「山形」に注目して、実際の標高が最も高い山塊が図上で高く描かれているのではなく、支尾根を周囲にのぼ

し広げた存在感、集落との位置関係や村の領域の外縁が認識されて体感的に描かれたと推測している。絵図のゆがみの意味を考える、というのが絵図研究の主題の一つであるが、本章はそうした絵図研究に新たな視点を提供してくれている。

第5章『熊谷家伝記』にみる開発定住と空間占有—中世を回顧する近世山村民（その1）—：本章は近世の山村民が自村の起源についてどんな歴史像を抱いていたのか、という視点から伝記を読み解くことを意図している。その読みときは、「落人」の末裔（直退）が「落人開村伝説」の形成と変容に重要な役割を果たしたという想定のもとで、直退が熊谷家の権威・権益を正当化する際に、集落の開村とその周囲に領有権が成立したように描いたことを論証している。下伊那郡という限られた山村空間において、熊谷家が開発定住していく際に、外部世界には口を閉じ、内部世界の先住者に対しては好意的に叙述している点などを紹介しつつ、さらには後続の侵犯者との境界策定状況を示すことによって、「伝記」から「無人の山野」・「閉じた小世界」・「潜在的な境界」という三つの構図を読みとっている。

さて、この論文からは伝記というテキスト読みの奥深さを教えられるわけであるが、その中で興味深いのが伝記作成者の心性読みである。筆者は直退の空間に歴史を重ね合せようとする「歴史地理学的心性」を見出している。本書のタイトルとしても使えそうな得た読みである。ところで、評者が気になった言葉が本文で多出する「落人」である。皆、無意識に使っているこのラベルは、よくよく考えてみれば後生の者がつけた言葉であり、本人のみならず山村開発者の誰もが自らを「落人」と認識していたのだろうか。

第6章「大和国吉野川上流域における「由緒」と自立的な中世山村像—中世を回顧する近世山村民（その2）—」：個人がその家の由緒を正当化する行為は、家系図作成、ルーツ探し等、歴史上ままあることである。前章は、単なるルーツ探しの域を越えているが、その代表的な事例といえよう。それに対して本章は、個人ではなくより広域的な山村社会が由緒の共有化をはかった過程を描いている点に特色があり、それはこの地が南朝の地という特殊な地域ならではの点を差し引いても、その着眼力と説得力には敬意を表せざるを

得ない。権力（南朝）に従属するとか、逆に無主の地であったとするのではなく、権威に奉仕しつつも領主として服従するわけではなく、非領主制的な政治体制を維持してきたのが「郷民」であり、その居住地域である吉野郡が「由緒の地」となり、その点を後世の山村民が嘆願書で主張していく。

この中世を回顧する論理が明治時代初期に至っても助郷役免除の嘆願書に使われていたことは、その有用性を示す証左ともなるが、逆に、少々うがった見方をすれば、近世、明治と長期にわたって支配者側は苛斂誅求を止めなかったわけで、その論理さえも効目がなかったのではと考えられる。筆者の文脈とは異なった研究になるが、「年貢皆済目録」等の分析を通して、嘆願書の効果を実証するような成果が出されればと思う。

第7章「地方書にみる近世の村落類型観－里方・山方・浦方－」：山村とはなにか、その領域とは、そしてそれに対する認識とは、を本書を通して問いかけてきた筆者にとって、農村、漁村を含めて村落全体の中で山村を位置づけ直す必要が実証研究を積み重ねる中で芽生えてきたものと推察される。幾重にも連なる奥山から、急に視野が広がった尾根に立ったところか。眼下には平野が展開しその向こうには海が見える。この章は本書にとって意にかなった終章であり、また始りの章でもある。

さて、ここでは現在使われている「山村」という言葉、「農山漁村」という類型のルーツを探るのが目的とされている。ある村を「山村」と呼び、別の村を「農村」と名づけているわけであるが、そのような見方はいつどのようにして生じたのであろうか、という問いかけのもと、筆者は地方役人のガイドブックである地方書に現れる「里方」・「山方」・「浦方」といった語彙に着目し、17～18世紀の動向を探ることを試みている。その結果、近世社会が確立した頃に村落を類型化する視線もまた明確になったとし、村落を類型化する視点が、単に村落を分類するだけでなく、領地や国土の評価づけにつながる素地をもっており、これが近代の「農山漁村」概念にも継承されたのではないかとしている。

筆者の着眼点、史料分析には敬意を表するが、果して村落を類型化する視線が近世時にどれほど明確になっていたのであろうか。里方＝農村、山

方＝山村、浦方＝漁村とその継承性を強調しない方がいいのではと思う。数多くの地方書の例文を引用し、村落類型を見出しているが、それらの用語は、村落類型と言うより、村落内の地域差を認識するためのものであろう。すなわち「里方」というのは、ある農・山・漁村内の平地集落部分をさし、山方は各村落の山がちの部分をさし、それらの差を十分にチェックし総合的な村柄を決めなさい、というものであろう。今後、村落類型論を精緻化するにあたっては、農・山・漁村という村落類型を公式に使用した明治政府の官人の意図を究明する作業が必要となろう。

最後に、全編を通読して感じたことを2、3付言しておきたい。第1に、本書のタイトルで「構造」という言葉が使われているが、そして第5章で示されたように一部で中世山村の構造を抽出する作業が行われているものの、むしろ各章共通して後生の人々がいかに自分たちの山村を作り上げていったかという点を追究しているが故に、「構造」よりも「構築」のほうがよりインパクトがあったように思われた。第2に、筆者の研究スタイルがあくまでも史料をもって語らせるという実証的な方法で貫徹されている点である。それ故に、原文の引用が多く、古文書に不慣れな読者には難解かも知れない。しかし、第2章での境界を記した史料、第4章での出作争論史料、第6章での由緒を記した史料等は、数多く載せられている図表と共に本文を理解する上で大きな役割を果たしている。時にはこうした情報から思わぬ想像がかき立てられたりもする。例えば、『熊谷家伝記』から開発定住の事情をまとめ上げた表5-2を読んでいると、下伊那への移住者の出身地が、三河、遠州などの近隣のみならず、駿河国、伊勢国、さらには但馬国までもでてくる。なぜこんなに多くの人が遠方から下伊那の山村に入ってくるのだろうか。中世の移動の自由さを差引いても、「落人」のマイナスのイメージではない、ある種のユートピア的な世界がそこにはあつたのではなかろうか。落人の心性史を解く鍵がこんなところにあるかも知れない。

古文書と格闘する思考の地理学者というイメージの米家氏は、実は山野を駆けめぐるフィールドワーカーでもあったことが氏のあとがきでわかる。第2章で山地空間の認識、境界を語る際に、